



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	クルグズにおける非畜産業従事者の家畜資産保有の経済的利点 : ナルン州アクタラ地区並びにナルン市におけるブレ調査報告
Author(s)	大倉, 忠人
Citation	日本中央アジア学会報, 15, 90-91
Issue Date	2019-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.15.90
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88376
Type	journal article
File Information	JB015_006okura.pdf



クルグズにおける非畜産業従事者の家畜資産保有の経済的利点 — ナルン州アクタラ地区並びにナルン市におけるプレ調査報告 —

大倉 忠人

本研究はクルグズにおいて家畜⁽¹⁾を資産として保有する非畜産業従事者⁽²⁾(通称：不在畜群所有者⁽³⁾)の経済的利点の解明を試みるものであり、本発表では2019年3月上旬に筆者がナルン州アクタラ地区並びにナルン市⁽⁴⁾において実施したプレ調査の結果を中心に報告した。

1991年のソヴィエト連邦崩壊後のポスト社会主義のなかでコルホーズ・ソフホーズが解体・解散され、市場経済化に伴う産業構造の転換などにより、畜産業従事者は社会経済の混乱により一時的に増加に転じたものの、近年は減少の一途を辿っている。また、都市部は元より、農村部においても家畜を直接保有する人は減少している。しかし、非畜産業従事者の中には自らの家畜を畜産業従事者に委託し、家畜を資産として保有し続けているケースが散見される。家畜を資産として保有するに至った経緯や動機はどこにあるのか。また、その動機の背景にある経済的利点を現地調査により解明すること目的としている。また、ポスト社会主義社会に生きるクルグズ民族のメンタリティの中にどのくらい市場経済化が浸透しているかを解明することに意義を見出したいと考えている。

本研究に類似した先行研究の一つとして、ロシアのサハ共和国における馬委託管理に関わる社会経済的諸相の提示と現代の生業のあり方をポスト社会主義の文脈から解明を試みた[高倉 2012]がある。本先行研究では、ポスト社会主義の社会下における雌馬の委託管理は、サハ社会で遊牧の伝統を維持するための適応の結果として、①貨幣獲得を目的とする貨幣経済と②家畜そのものを富とする経済という二重経済を生んだと結論付けている。

クルグズにおいて不在畜群所有者が家畜を資産として保有する動機の背景には経済的利点

(1) クルグズにおける主要な家畜は、羊、山羊、牛、馬である。

(2) 本論では、畜産を主たる生業としていない者を指す。屋敷地で少数の家畜を飼う者も含むが、副業的畜産農家や兼業畜産農家などは含めない。

(3) 放牧地で行われる家畜の世話・管理を他人に任せ、基本的に放牧地にはいない所有者。英語では、absentee herd ownersと呼ばれている[高倉 2012: 178]。

(4) クルグズ共和国のナルン州は南部の山岳地帯に位置する州であり、州内にはクルグズ民族が大半を占めるクルグズの中のクルグズが住む場所として現地において認知されている。

があり、具体的に以下の5つの動機があると筆者は推論する。

- (1) トイ(宴会)の際に自らが所有する家畜を取り寄せ、自ら裁いて振舞うことができること【自己消費】
- (2) 市場で家畜そのものや調理された肉を調達するより、安価で信頼性が高いこと【価格／安全性】
- (3) 他の資産よりも資産としての運用効率が高いこと【運用効率】
- (4) 貨幣経済一辺倒に対する不安からくる家畜の資産としての保有【リスクヘッジ】
- (5) クルグズ社会において遊牧遊牧の伝統を維持したいという思い【遊牧民族としてのアイデンティティー】

については、不在畜群所有者は上記(1)～(5)のどの動機を強く持っているのか、また実際に家畜を委託することに経済的な利点がどのくらいあるのか、コスト構造を解明するためのヒアリング調査を実施する必要がある。なお、上記(5)は経済的利点の要素を持ち合わせてはいない。

今回は村落部にあたるナルン州アクタラ地区と都市にあたるナルン市の2か所において計4世帯から簡易的なインタビュー調査を行なった。その結果、

- 都市部の委託者は経済的利点(損益)を鑑みながら、委託のありかたを見直している
- 都市部で収支を計算した世帯では、家畜の管理を委託せず、市場や親戚などから家畜を必要なだけ調達
- 村落部では損益よりも生業経済を維持することを理由に屋敷地や委託により家畜の保有を継続
- 村落部ではコストを精緻に計算せずに委託している

ということが判明し、今後の本調査実施に向けた視点や課題が明確になった。

今後は、先行研究調査の深耕に加えて、インタビュー調査の裏付けを行なうべく、関連統計データの収集と分析を進めたい。また、本格的な現地インタビュー調査を通して、より一層精緻なコスト構造分析から経済的利点を導出することにより、本研究の目的の達成に加えて、学術的意義をより一層明確にしていきたい。

参考文献

高倉浩樹 2012『極北の牧畜民サハ——進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』京都：昭和堂。

(キヤノン株式会社)